

夏目漱石『吾輩は猫である』第三章を読む

—名前のない猫と登場人物—

セト ラジャディーブ
SETH Rajdeep

キーワード 夏目漱石、無名の猫、猫の意味、無名の猫の対比として他の登場人物、猫股

1、はじめに

ここでは、夏目漱石の『吾輩は猫である』の第三章について考える。初めに、第三章の場面と漱石との関係を考える。その後、特に猫に注目する。なぜ、猫だろうか。また、なぜこの猫に名前がないかということは重要である。どのような意味があるのかを考えるために、名前がある登場人物の“名前”の意味についても考えていこうと思う。

2、第三章の主な場面

まず、第三章の主な場面について考察する。話の中のそれぞれの出来事や登場人物の行動と、実際の夏目漱石の意見や行動の関係について分析を試みる。そこから、いかに漱石の現実から話題が書かれていたかや、漱石の興味が分かるだろう。

2-1. 主人が天然居士の墓銘^{てんねんこじ}を考えている場面。

最初に、細君がやってきて、今月のお金が足りないという文句から始まる。ここで、前の章でも出て来たジャムの話がまた登場する。夏目漱石はジャムや甘いものが好きだったという話は有名である。しかし、ここで実際の漱石のもう一つのエピソードが、登場するのである。それは、主人が鼻毛を抜く癖である。細君の「お金が足りない」という言葉に、主人は鼻毛を抜いて細君の目の前に見せる。細君は笑いながら茶の間へ入って行って、この金銭問題の話は終わる。その後も、主人は鼻毛を抜きながら原稿を書こうとあせるが、なかなか書けない。(『吾輩は猫である』新潮社p.88-89) この場面の珍野苦沙弥の鼻毛

を抜く行動は、漱石の実際の行動と共通していると言われている。漱石の門下生である内田百閒の次のような話が証明している。

「私の所蔵する遺品の中に、漱石先生の鼻毛がある。…省略…私と他二三人で、道草の書きつぶしの草稿を貰つて、分けた。家に持つて帰つて、私とその草稿を一枚づつめくつて推敲の跡を見て行くと、中には書きかけの余白に、丹念に直線ばかり引いたものもあり、幾何の図の様なものや、散らかつたインキの汚染に、粹をつけた模様などがあつた。先生の筆が渋つて、苦しんでゐられる様が、目に見えるやうな気がした。

その中に、変な物のくつついた草稿があるので、何だらうと思つて見たら、鼻毛を丁寧に植ゑつけてあつた。」(内田百閒 「漱石蓄音器・漱石遺毛」 p.211) ²

この鼻毛のエピソードだけではなく、天然居士という人物も実際に漱石の友人である。それは漱石の第一高等中学校予科からの親友の米山保三郎のことである。彼は熱心に参禅し、もらった居士号は天然居士と言つた。夏目漱石の妻である夏目鏡子も本の中で「米山天然居士・天然居士」と呼んでいる。³この本の中で、漱石が結婚して新生活を送っている時、大学時代の友達の米山天然居士が亡くなつたと鏡子は書いている。米山天然居士の話は、漱石が鏡子にも話していたようだ。例えば、米山は非常にわがままで、友達で喧嘩しない人はいなかつた。その上、文科大学始まって以来の怪物だと漱石は言っていた。有名な話として、米山は大学の歴史の試験のとき、時間が切れても答案を書き書いて、次の朝まで一人で教室で答案を書き書いていたと鏡子が話している。予備門時代に漱石が将来は建築の勉強をしようと思つていると米山に言つたところ、「莫迦な、この貧乏國で、どれだけ立派な建築が出来ると思ふか。知れたものぢやないか。それよりか文學をやつて、傑作を後々迄のこせ。」⁴と米山にいわれたという話は、特に伝記でよく出てくる。

ここで、『吾輩は猫である』の主人は、天然居士の墓銘を考えている。実際、漱石は米山が亡くなつた時、次のようなことをしたと鏡子が回想している。

「大學時代二人制服でならんで寫した寫眞であります。其後其の寫眞の米山さんの半身だけを、四つ切位に引きのばさせまして、其上に追悼の句を題しました。

空間を研究せる天然居士の肖像に題す

空に消ゆる鐸のひゞきや春の塔 』⁵

つまり、漱石は実際に天然居士が亡くなつた時、句を考えていた。これを、

パロディーにして、小説では「天然居士は空間を研究し、論語を読み、焼芋を食い、鼻汁を垂らす人である」⁶となっている。ここからも、漱石の実生活での体験が、作品に取り入れられていることがよく分かる。

2-2. 細君と迷亭の会話。(主に細君の主人に対する愚痴。)

細君との会話の内容については、実際の夏目漱石の細君であった夏目鏡子の本から何か共通したエピソードがないか調べて見た。ジャムを舐めすぎるといふ話については、子供達と一緒にパンに砂糖をつけて食べたという話があり、甘いものが好きであったことが分る。また、本を買いすぎるといふ話については、夏目鏡子は下記のように語っている。

「此の頃が一番金に困つてゐた時なので、一寸したことに弱りました
が、しかし苦しい中にも丸善から本を買ふのだけは、よして下さいとは言
へず、足りないときはだまつて質屋通ひなどして、どうやら凌ぎをつけて
居りました。尤も夏目の方でも不^ふ断^{だん}は家の暮らし向^{むか}きなどに口を出^だすでは
なし、自^じ分^{ぶん}も本を買^かふ外^{ほか}お小遣^{こづかい}を使^{つか}ふではなし、(省略)」⁷

b) 本を買いすぎるといふ場面では、細君が部屋に来て主人に家計が苦しいことと本を買いすぎることについて文句を言う。主人が面白い答えや行動で、文句を言えなくするが、実際、漱石の細君の鏡子は本を買うことについて文句を言わなかったらしい。これは鏡子の意見なので、実際は漱石は文句を言われていたかもしれない。鏡子が本を買うことについて文句が言えなかったといつても、それは漱石がどう感じたかが問題なので、本当のことは分からない。だが、本ばかり買っていたということ、それが細君にも分かっていたということは共通している。また、鏡子が直接言わなくても、漱石には本を買うことが文句の一つだと感じていて書いたのかもしれない。学校から帰って、着物へ着替えるのが面倒で、外套も脱がないで、食事をするという話について本当かどうかは、分らなかった。ただ、服装について、漱石は神経質で几帳面(きちょうめん)でおしゃれであったと『漱石の思ひ出』には書いてある。貧乏な時には、服装を余り気にせず文句も言わないという面もあったと鏡子は言っている。

2-3. 主人帰宅。寒月君の演説「首縊りの力学」

寒月君の演説「首縊りの力学」は、嘘ではなく本当にある論文である。

「出典は、一八六六年(漱石が生まれる前年)、イギリスの権威ある学術誌『フィロソフィカル・マガジン』に掲載された、サミュエル・ホウトンという人の「力学のおよび生理学的にみた首縊りについて」という、れっきとした物理学の論文である。」(小山慶太「科学への触手」p.131)⁸

このように、漱石は実際に存在する論文を作品に取り込んでいる。そして、この論文は第五高等学校時代の教え子である寺田寅彦から知ったと、小山慶太は述べている。漱石の小説には、物理学や科学がよく登場する。例えば、坊ちゃんは物理学校出身の数学教師、『三四郎』には「光線の圧力測定」⁹という論文が登場することが、指摘されている。つまり、漱石はこのような、一見、嘘のように思える滑稽な話の中にも、作り話をするのではなく、実在する現実的な論文や数式を使っている。このような論文を読んだことのない一般の当時の読者は、「首縊りの力学なんて、冗談ではないか」と思って読んでいたのかもしれない。しかし、漱石は、ある意味で非常に知的で深みのあるジョークをこの場面に取り込んでいるといえる。

2-4. 2、3日後、迷亭の訪問。金田鼻子の訪問。

金田鼻子の訪問から、『吾輩は猫である』の中で一つの大きな出来事が始まる。金田家・富子と寒月の結婚話から、金田という俗社会と苦沙弥・迷亭の対立が引き起こされる。この大きな対立が、『吾輩は猫である』の中のシニカルを中心になっているとあって良い。地位やお金によって人を見る金田家の人々に対して、迷亭は、実は漢学者である伯父を、「男爵である」と嘘をつき、金田の反応の違いを読者に見せ、笑わせる。また、次の場面では、金田の娘富子の傲慢な会話は、金持ちのわがままさと傲慢さを笑う皮肉となっている。

2-5. 猫は、金田家へ12分間の探検に行く。

この大きな対立が始まると、猫が動き出す。この金田家、娘の金田富子はどうな人物なのかを見るために、猫は金田家へ入り、探検する。その場面では、金田家に対する皮肉と同時に、主人への皮肉も出てくる。主人公の苦沙弥は英語教師で、生徒から「番茶」は英語でなんと言うのかと質問され、そして、“savage tea”と答える。“savage”は野蛮という意味である。これは番茶の「番」を“やばん”の「ばん」と勘違いして、野蛮なお茶、つまり「蛮茶」という意味の英語訳“savage tea”と答えているのである。このように、猫の目から見た世界では、主人の敵・対立者である金田だけではなく、主人にも皮肉な視点がある。全ての人物に皮肉なコメントがつけられている。それが、この小説の面白いところでもある。

漱石自身も、英語教師であった。その点から、英語教師であったからこそ、英語教師への皮肉な話が書けたのだろう。つまり、この主人の話は、漱石の英語教師の変な英訳への皮肉とも読み取ることが出来る。漱石は、英語が堪能だったらしい。誰かが鏡子に「夏目の語學は行く船の中から彼方の方に賞られ

たといふ位だから』¹⁰と言ったそうだ。国費留学生として英語研究に選ばれたくらいだから、当時のほかの日本人より英語はとても上手だったろう。しかし、漱石は、英語があればほど出来たにもかかわらず、翻訳は一冊も行わなかった。そこには、“翻訳”に関する漱石の何らかの問題意識があったのではないか。

また、英語教師の教育についても漱石の論文があり、日本の英語教育に関して漱石なりの意見をもっていたようだ。夏目漱石の英語教育論¹¹「語学力養成について」（『学生』明治44年1月、2月）には、教師育成の問題について漱石は次のような対策を挙げている。（高梨健吉・大村喜吉著『日本の英語教育史』p.28-30）

1：大学の英文科に入る前の英語特別教育。

2：英語教師の勉強奨励のための文部省による定期的な試験。

3：教科書の難文をやめて英国の新聞を基礎とした実用的な教科書作成。

こうした対策は、現代にも通用する。つまり、当時の英語教育や英語教師の英語力に漱石は何か関心があった。だからこそ、主人苦沙（くしゃ）弥（み）の英語教師の能力に対する皮肉を書いたのだろう。留学経験がある英語教師の漱石の経験が、このような話に使われている。

2-6. 猫が主人の家へ帰宅。迷亭と寒月と主人の会話。

金田夫人の鼻についての議論が繰り広げられる。

第三章は、以上のような話の流れである。登場人物同士の会話やエピソードによる皮肉や滑稽さが、この『吾輩は猫である』を面白くしていて、魅力である。この滑稽な話は、漱石の実際のエピソードがうまく使われているという視点で読めばさらに面白い。実際のエピソードが使われているからこそ、滑稽な話だが完全な嘘ではなく、読者は笑いながら、しかし身近に感じる事が出来ると思われる。

3、登場人物の名前¹²

登場人物の名前について、ここで詳しくみていく。

猫：無名

全ての登場人物を皮肉な視点で見ている猫は無名である。なぜ無名なのかの

理由は、分からない。主人に飼われ、家に住み着いているのだから、何か名前と呼ばれてもいいのに、一度も呼ばれていない。猫本人が、名前が無いことを話の最初に言う。猫の自己紹介を読むと、名前も生まれも何も分からないということが書かれている。しかし、猫は落ち込んでいる訳でもなく、悲しそうでもない。逆に、とても普通に堂々と自己紹介している。猫なので、名前がないことや生まれが分からないことが一般的だからだろうか。しかし、家に住めば、誰かが名前をつけることが普通である。特に、子供がいる場合、名前がありそうだ。しかし、鏡子の「猫の話」¹³を読めば、実際、子供や漱石が「猫はどうした」「猫が来た」と呼んでいることが分かる。つまり、夏目家では猫を「猫」と呼んでいた可能性がある。当時、動物をペットとして飼っても、今の感覚と少し違うだろう。

だが、小説の登場人物として、猫に名前をつけることは、簡単である。猫の世界だけでの名前をつけても良かっただろう。しかし、なぜ猫に名前をつけなかったのか。この点を考えるためにも、外の登場人物に漱石がどのような名前をつけたのかについて考えていきたい。

文明中学英語教師／主人：珍野苦沙弥

主人の苦沙弥という変な名前は、どこから来たのか。この不思議な名前の根拠の一つの可能性として、落語との関係を挙げてみる。

「落語に「くしゃみ講釈」がある。これは、ご承知のように、定連が客席から胡椒の粉をあおぎ上げて、講釈師にくしゃみを連発させて困らせる話だが、その動機となったのは、「世辞がない」「大面すぎる」講釈師の傲慢な態度や客席で居眠りして講釈師に注意され恥をかかされたことに対して腹を立てたからであった。（初代三遊亭金馬「くしゃみ講釈」『百花園』明33年・6）

金田夫人も苦沙弥の家へ行って「世辞がない」苦沙弥たちに自尊心を傷つけられ、その「生意気」を懲らしめようとする。車屋の神さんや車夫たちは、苦沙弥の家の垣根の外から「高慢ちきな唐変木だ」などとやじり倒す。私は、苦沙弥の名は、落語「くしゃみ講釈」から思いついたものではないかと推定する。」（水川隆夫）¹⁴

これは、水川が述べている通り推定である。しかし、落語の世界で、「くしゃみをする事」が笑いのモチーフになっているのは、興味深い。つまり、当時の

人々に、くしゃみが滑稽（面白い・ユーモア）なモチーフとして受け入れられていたと考えられる。

細君：無名

主人の横にいて、よく登場する細君にも名前がない。

子供：とん子、坊ば

子供には、名前がある。坊ばは本名ではないが、あだ名がある。あだ名も一つの個性的な呼び方なので、人を特定する名前と同じ役割を持っている。

美学者：迷亭

迷亭はよくふらりと主人の家にやってくる。そして、主人や細君と話をする。しかし、話をいつもどこかへそらせ、人を迷わせる。迷っているかのようにふらりと家に来て、真面目か真面目ではないのかよく分からない人物である。

そこには、高等遊民的な性質がみられる。高等遊民とは、明治期末期の、高学歴を得ながら就職できない青年たちを言う。漱石は、社会に参加しないスタンスをとらせることで、高等遊民にある種の批評性を持たせているといわれている。¹⁵

夏目鏡子は、迷亭について心当たりがないか尋ねられ、次のように答えている。

「迷亭などといふ人物は誰をモデルにしたものか私には見当はつきませんが、大方、自分のもつて居る性格を、あのものぐさなむつつり屋の変人苦沙弥と、軽口屋の江戸つ児迷亭とに二つにわけて書いたものでありましよう」（玉井敬之 「『吾輩は猫である』の一人物－迷亭の肖像 p.52」¹⁶

つまり、主人の苦沙弥と迷亭は、鏡子からみれば漱石の一面にみえるのだ。鏡子が話す漱石についての思い出話を読めば、漱石のイメージが変わる。漱石は、写真では、無口で、まじめそうに見える。しかし、ジョークも言うし、軽口屋である。漱石が、神経衰弱的な性格だったという話は有名だが、ジョークを言ったり、みんなを楽しませていたという性格の一面は一般的に知られていない。そういう点で、主人の苦沙弥と迷亭は、漱石の性格の二つの部分を、登場人物にしたといえる。

理学士：水島寒月

寒い月とは、非常に冷静な印象を受ける名前である。寒月は、金田富子との結婚話を聞いても、驚いたり、照れたり、恥ずかしがったりしない冷静な性格である。科学的な理論で、首縊りの説明をまじめにする人物であるから、感情的な人物ではない。主人や迷亭と違って、科学的な人物という点でも、このような名前はこの人物が冷静であることを象徴していると考えられないだろうか。

寒月のモデルは、寺田寅彦だという。『吾輩は猫である』の登場人物の中で、寒月が、一番誰がモデルか分かりやすい。夏目鏡子も、『吾輩は猫である』は当時の生活であった出来事がたくさん出てくるといっている。また、登場人物についても、当時、家に来ていた人たちから推測できると言っている。当時、漱石の家では、「文章會」というのが毎月一回ぐらいで行われていて、大体、高浜虚子、坂本四方太、寺田寅彦、皆川生禱、野間真綱、野村傳四、中川芳太郎などが来ていたそうである。¹⁷そして、その中で、『猫』を高浜虚子が朗読し、みんなで聞いていた。その頃から、寒月が誰か、みんなには分かっていたらしい。特に、寒月が椎茸を食べて前歯が欠けた話は、ちょうど正月に寺田寅彦が何かを食べて歯が欠けた話と同じであった。そこで、この「文章會」のときに、寺田寅彦が漱石に抗議したことが鏡子の本に書かれている。しかも、漱石の死後、鏡子が漱石の思い出を書いた本を出版した時にも、寺田寅彦は周りから寒月だといわれ、教室でも学生に「寒月がいる」といわれ、非常に困っていたと述べているくらいである。¹⁸『吾輩は猫である』が、どれほどたくさんの人に読まれ、影響を与えていたかがここからも分かる。

実業家：金田君→お金で人を動かしている人物で、名前「金田」＝お金を象徴していると推測される。

- ・金田鼻子→鼻が特徴的で、何度も悪口を言われる。
- ・金田富子→富＝お金があるという意味。

金田家の人物の名前は、非常に変な名前である。実業家だからか、金持ちだからか、姓は「金田」である。また、特に、娘と母親の名前が変である。娘の富子は、金に富むという意味だろう。しかし、鼻子はなぜ鼻なのか。金田鼻子は、かなり個性的な人物で、彼女の鼻について苦沙弥たちは議論し、何度も話題にしている。この点について、次のような説を紹介する。

『『猫』（『吾輩は猫である』の略）の終末近くに「とにかく此勢で文明が

進んで行った日にや僕は生きてるのはいやだ」(十一)と苦沙弥が感慨する所があるが、この表現を待つまでもなく『猫』の中心が現代文明への激しい呪詛、というより、ほとんどその全面否定にある事は明白である。なまじ文明批評などというような生やさしいものではない。苦沙弥の呪詛は物質文明とそれを代表する俗物に向けられる。主なる人物、事件として金田鼻子夫人が君臨し、・・・省略・・・たえず金のある事を鼻にかける。金田鼻子はもちろんそのパロディであり、金田富子も同様である。」(上田正行『吾輩は猫である』試論 p.123)¹⁹

つまり、鼻には「鼻にかける」などという慣用句がある。鼻に関係する日本語の慣用句は、プライドが高いなど、ネガティブな意味で使われることが多く良い意味はほとんどない。鼻から連想する言葉は、特に自慢・プライドが高いことに関連している。そこから、漱石が名前をつけていることは、漱石が、人物の名前一つ一つを丁寧に考え、意味をもたせていた証拠だと言える。

天然居士²⁰：曾呂崎

女中：御三

主治医：甘木先生

この三人は、第三章で個性が分かるほど出てこなかったが、一応書いておく。

このように、夏目漱石は登場人物の名前一つ一つにこだわり、登場人物の意味や性格を象徴させている。ここで気付いたことは、主要人物の中で名前がないのは、猫と細君だけである。名前を丁寧に考えているにもかかわらず、なぜ名前をつけなかったのだろうか。次に、名前がない猫の意味について考えたいと思う。

4、猫の意味

4-1. 猫は、なぜ「猫」でなければならなかったのか。

なぜ、他の動物ではなくて、猫でなければならなかったのか。その考え得る理由を次に挙げる。

一つ目の可能性は、実際に漱石の身近に猫がいたということである。この点について、鏡子の証言がある。²¹漱石は実際に猫を飼っていて、猫が初めて家に来たときの話、雑煮を食べて踊る話、福猫の話など多くがほぼ実話に近い。ただし、犬も飼っていたので、これだけでは説明できない。

二つ目に、第三の探検の場面は、猫であることが生かされている点に注目する。音をたてずに歩いたり、家に忍び込んだりするの、犬よりも猫の方が得意とする。ただ、その場合、狐でも蛇でもいいのかもしれないが、やはりペットということを考えれば、猫しかいないと思われる。

三つ目に、猫又（ねこまた 霊的な能力）という表現に注目する。猫又（猫股）とは、昔からある日本の伝説の生き物である。猫の妖怪で、尻尾が二本に分かれているのが特徴的で、そして、人の姿に化けるといわれ（大部分は、老女に化ける）、また人を食べることもある。例えば、『徒然草』には奥山の猫又が人を食べる話や、老いた飼い猫が猫又になる話がある。（横山泰子 「芝居と俗信・怪猫物の世界—『獨道中五十三驛』試論—」 p.131）²²

この恐ろしい猫又・猫の妖怪について、「怪をなす動物としては、狐や蛇など色々であるが、中でも「猫の怪異」は特に近世に本格化したもので、しかも都市の妖怪としての性格がみられるという。」²³もともと、猫はいつから日本にいるのか。次のように言われている。

「ネコが日本に入ったのは奈良朝初期と推定されているが、一般の家庭にまで普及したのはかなりのちのことであろう。一方、中世末から近世にかけて、三都をはじめ城下町・商業都市が各地に発達すると、妖異譚においても都市化の傾向はさげられなかった。この状況のなかで狸は、山のタヌキと街のネコに分化したと思われる。…省略…近世後期になるとネコの怪異はいちじるしく衰える。…省略…これにかわって成長するのは、人の従者としてのネコを語る説話である。『耳袋』七の「猫忠臣の事」のネコはみずからを犠牲にして飼い主を守る。…省略（『耳袋』七の「猫忠臣の事」の話）…

たしかにネコは、イヌとことなり人に心を許さないように見える一面もっているが、やはり人に飼われている以上は、イヌに匹敵しなければならない。そして、二十世紀末の現在とちがって、ネコはペットであるだけでなく、ネズミを駆除する有用性がこれに求められていたのである。」²⁴

猫とは、不思議な力を持つ生き物として、つまり、妖怪の猫股として、昔の日本では捉えられていた。漱石の時代にも、江戸時代の妖怪という考え方が残っていただろう。明治に入って近代化していたにもかかわらず、猫には何か

不思議で不気味なイメージがあったのではないだろうか。

また、漱石の『吾輩は猫である』の猫は、街に住み、主人を持っているのでペットと言える。そして、主人・寒月のために金田家へ偵察に行く。これは、引用にある猫股の歴史で見られた変化、つまり、都市化の中のペットとしての猫が、「悪い妖怪」から「主人を助ける猫」へと変わった時代の変化と似ていると考えられる。つまり、猫は主人の味方となっている。

更に、横山泰子は「猫の踊り」は歌舞伎のこの作品や他の作品にも登場し、「猫の踊り」は当時の通俗な常識であったと述べている。同じように、『吾輩は猫である』にも猫の踊りが登場する。近代的な漱石の作品に猫股が登場することは、前近代的な流れがみえて、興味深い点である。

4-2. 猫のイメージ

また、第三章から作品の中の猫に変化が見られる。猫の世界での友人をすべて失うことから、第三章は始まる。第一章・第二章と比べて、猫はどんどんと人間世界へ入り込み、観察し始めるようになる。人間に近くなってきたと猫が自分で言う場面もあり、これは作品に対する漱石の視点の変化が関係していると思われる。

こうして、猫がどんどんと人間に近づき観察し、批評していくようになると、猫が作者を表しているように見えてくる。『吾輩は猫である』に対する当時のイメージを評論や似顔絵から探してみると、猫の顔が漱石になっていたり、作者が猫の視点から書いているというイメージが見られる。

これに対して、漱石は次のような言葉を残している。

「主人も僕とすれば僕、他とすれば他、どうでもなる。とにかく自分のあらが一番書きやすくて当り障りがなくてよいと思う。人が悪口を叩かぬ先に自分で悪口を叩いて置くほうが洒落てるじゃありませんか。」

(明治38年(1905年)1月1日 野間真綱あて)²⁵

「彼らのいふ所は皆真理に候。しかしただ一面の真理に候。決して作者の人生観の全部に無之故その辺は御了知被下たく候。あれは総体が風刺に候。」

(明治39年(1906年)8月7日 畔柳芥舟あて)²⁶

このように、様々な人に、『吾輩は猫である』の主人公や寒月についてモデルは誰かという質問を受けていただろうということが分かる。

5、おわりに

なぜ、猫なのだろうか。これは、漱石が猫を飼っていたことも原因だと思うが、江戸時代からの猫股という不気味な猫のイメージも少しは影響していたと考えられる。漱石自身が猫股の存在を信じていたという意味ではない。ただ、信じていなくても、猫には昔からのイメージが少しは残っていたという意味である。猫股は人に化けるので、人間のような視点で、人間を批評してもおかしくない。もし犬だとしたら、人に化けたりしない。犬は、猫股のような意味はないので、このような批評の視点に使うと思わなかったのではないだろうか。

漱石は、名前やジョークなど、とても細かく色々なところに意味を持たせている。『吾輩は猫である』は、ただの滑稽な小説ではない。最初、人に勧められて書いたので猫に名前を考えていなかったとしても、途中で名前をつけることはできた。しかし、名前をつけなかった。それについて、越智治雄は、猫は無名でどこにも属さない「自由」を持っていると言った。²⁷ 漱石自身が猫の視点で社会を見たり、金持ちに対する批判や、貧乏人の生活などを細君の立場からも見ていると思われる。しかし、本当は貧乏ではなく、本を沢山買すぎて細君に文句をいわれ、いかに本が大切であるかを述べていたり、当時は高価であると思われるジャムもなめているから貧乏ではないことを暗に主張していると思われる。細君に名前をつけてしまうと、「自由さ」がなくなり、夏目家の意見になってしまう。名前がないことから、自由に二つの視点を使える。まして、社会を自由に批判することだけでなく、自分自身に対する批判や反省も込めて書いていると思われる。

漱石はこの小説の中で、漱石自身が世の中のことには関心が無いと思われていることを承知の上で、本当はそうではないことを示している。金田家の家族の言動をとおして世の中の庶民的な発想もよく観察していることを面白おかしく表現しているのではないかと思う。これらの点から『吾輩は猫である』は単なる小説ではなく、急速に変わる世の中への批判も含まれているのではないかとと思われる。

『吾輩は猫である』の登場人物の名前は、とてもユニークである。逆に、猫に名前がない意味は、他の登場人物のように一つの決まった性格（個性）がないということだと思われる。猫股の血をひいているかもしれない猫は自分という。考える猫、人間を批評する猫とは、一種の妖怪のような存在で、現実的

はない（現実から離れている）面を持っていると言えるのではないか。名前をつけるとペット化してしまい、現実的になりすぎる。また、個性をもたせると人間のようになりすぎて、他の登場人物を批判できなくなる。猫股という江戸の考え方をうまく利用してジョークに使う、猫に批評する人の言葉と考えを与えた。

科学的な論文を作品に使っている漱石が、猫股の血を引くような非現実の猫を作り出して人間を批評している。非現実であるから、現実の世界を自由に動き回れるし、客観的に指摘も出来るといえるだろう。

そして、もう一つの批判の目は、細君である。この細君の客観的な批判は、主に家の中の人物（主人・迷亭・寒月）に向けられている。猫と細君という批判をする二つの人物に名前をつけていないことは面白い共通点である。逆に、批評される人には、名前（個性）が必要だったと考えることも出来るだろう。

参考文献

- *夏目漱石 『吾輩は猫である』 新潮社 平成16年
- *夏目鏡子述者 松岡譲筆録者 『漱石の思ひ出』 岩波書店 1929年
- *浅野洋・太田登編者『漱石作品論集成 第一巻 吾輩は猫である』 桜楓社 1991年
- *堀部夫功・村田好哉編者 『漱石作品論集成 別巻 漱石関係記事及び文献』 桜楓社 1991年
- *AERA Mook 『漱石がわかる。』 朝日新聞社 1998年
- *三好行雄編 『漱石書簡集』 岩波書店 1990年

注

- 1 墓石に記す文章。
- 2 文芸読本『夏目漱石』 河出書房新社 昭和58年 p.209-211より
- 3 夏目鏡子述者 松岡譲筆録者 『漱石の思ひ出』 岩波書店 1929年 p.39-40より
- 4 夏目鏡子述者 松岡譲筆録者 『漱石の思ひ出』 岩波書店 1929年 p.39-40より

- 5 夏目鏡子述者 松岡譲筆録者 『漱石の思ひ出』 岩波書店 1929年 p.39
-40より
- 6 夏目漱石 『吾輩は猫である』 新潮社 平成16年 p.88
- 7 夏目鏡子述者 松岡譲筆録者 『漱石の思ひ出』 岩波書店 1929年 p.130より
- 8 AERA Mook 『漱石がわかる。』 朝日新聞社 1998年 p.130-135より
- 9 この論文の出典は、1903年、アメリカの物理雑誌『フィジカル・レビュー』に発表されたニコルスとハルの論文である。(小山慶太「科学への触手」p.131)
- 10 夏目鏡子述者 松岡譲筆録者 『漱石の思ひ出』 岩波書店 1929年 p.94より
- 11 高梨健吉・大村喜吉著 『日本の英語教育史』 大修館書店 1975年 p.28-30より
- 12 参考:浅野洋・太田登編者『漱石作品論集成 第一巻 吾輩は猫である』 桜楓社 1991年 p.170
- 13 夏目鏡子述者 松岡譲筆録者 『漱石の思ひ出』 岩波書店 1929年 p.130-138より
- 14 水川隆夫 『漱石と落語 江戸庶民芸能の影響』 彩流社 p.103
- 15 AERA Mook 『漱石がわかる。』 朝日新聞社 1998年 p.160
- 16 浅野洋・太田登編者 『漱石作品論集成 第一巻 吾輩は猫である』 桜楓社 1991年 p. 51-55より
- 17 夏目鏡子述者 松岡譲筆録者 『漱石の思ひ出』 岩波書店 1929年 p.144より
- 18 夏目鏡子述者 松岡譲筆録者 『漱石の思ひ出』 岩波書店 1929年 p.146-147より
- 19 浅野洋・太田登編者 『漱石作品論集成 第一巻 吾輩は猫である』 桜楓社 1991年 p.114-130より
- 20 卒業後、大学院で空間論を研究。主人の親友。
- 21 堀部夫功・村田好哉編者 『漱石作品論集成 別巻 漱石関係記事及び文献』 桜楓社 1991年 p.243-247より
夏目鏡子談・松岡譲記 「漱石のモデル・猫の話」
- 22 小松和彦編者 『怪異の民俗学② 妖怪』 河出書房新社 2000年 p.126-140より

この論文は、江戸時代に流行った歌舞伎の一つの話『ひとりたびごじゅうさんつば獨道中五十三驛』に登場する妖怪の猫について書かれているものです。

- 23 小松和彦編者 『怪異の民俗学② 妖怪』 河出書房新社 2000年 p.126
-140より
横山泰子 「芝居と俗信・怪猫物の世界—『ひとり た び ご じゅうさん つぎ獨道中五十三驛』23試論
—」 p.126
- 24 中村禎里 『日本人の動物観—変身譚の歴史—』 海鳴社 1984年 p.195
-197
- 25 三好行雄編 『漱石書簡集』 岩波書店 1990年 p.121, 122
- 26 三好行雄編 『漱石書簡集』 岩波書店 1990年 p.166
- 27 越智治雄 「猫の笑い、猫の狂気」 p.56
浅野洋・太田登編者『漱石作品論集成 第一巻 吾輩は猫である』 桜楓
社 1991年 p.56-67より

